

第 2 部 日本語国際センターの交流活動紹介 - 文化理解のための交流実践 -

はじめに

- ・日本語国際センターでは研修事業で海外の日本語教師の研修を実施
- ・研修を受ける日本語教師のうち、約 50%が中等教育機関の教師
- ・「対国内中等教育機関交流（略称「中等交流」）」：
海外と日本の中等教育機関の教師や生徒との交流を推進しようとするプロジェクト

1 . 世界の日本語教育

1998 年度時点での日本語教育の現状（『海外の日本語教育の現状』1998）
世界 115 か国、機関数 10,930、教師数 27,611 名、学習者数 2,102,103 名

2 . センター事業概要

1) 何をする所か？

(1) 研修事業

研修の種類

海外日本語教師研修、日本語指導者養成、派遣専門家派遣前研修

対象と研修内容

対象：海外の日本語教師

内容：授業（日本語力向上、日本語教授力向上、日本文化に対する理解の深化等）
文化体験プログラム

過去の実績

2003 年度招聘研修生数 481 名

1989 - 2003 年度研修生数のべ 7,410 名

(2) 情報交流事業（2003 年度実績）

世界の日本語教育情報発信、定期刊行物発行、図書館運営

発信情報：『海外の日本語教育の現状』

日本語教育国別情報(海外 124 か国・地域の情報を掲載)

<http://www.jpff.go.jp/j/urawa/world.html>

定期刊行：『日本語教育通信』（年 3 回、各 17,000 部）

『日本語国際センター紀要』（年 1 回、1,500 部）

『世界の日本語教育(日本語教育論集)』（年 1 回、3,000 部）

『世界の日本語教育 < 日本語教育事情報告編 >』（隔年、3,000 部）

図書館資料：

日本語教育、言語学、日本事情等関係図書 35,374 点

視聴覚資料 4,844 点ほか

(3) 制作事業 (2003 年度実績)

日本語教材開発、教材制作支援、日本語教材寄贈

日本語教育フェローシップ ; 13 件

日本後教材制作助成 ; 14 件

教材寄贈 ; 1,092 件

3. 中等教育

1) 世界の中等教育機関の日本語教育

中等教育が日本語教育全体に占める割合

機関数 : 57.5% (6,280 機関)

教師数 : 33.2% (9,176 名)

学習者数 : 65.7% (1,381,077 名)

2) 中等教育の動き

世界の日本語教育で初等・中等教育での学習者数が多い国

<表1> 初等・中等学習者数 (1998 年度)

順位	国・<地域>	学習者数
1	韓国	731,416
2	オーストラリア	296,170
3	中国	116,682
4	米国	74,749
5	ニュージーランド	39,237
6	インドネシア	35,410
7	<台湾>	31,917
8	カナダ	12,815
9	タイ	7,694
10	英国	6,591

学習指導要領と最近の特徴

- ・各国で学習指導要領が出され、教育はそれに沿って実施されている。
- ・現行の指導要領で目標とされる数項目の中にコミュニケーション重視と文化理解が提示されている。
- ・オーストラリアなどでは以前からそうだったが、韓国、中国、タイなどではごく最近そのように変化。
- ・従って中等教育機関の教師は、文化理解に高い関心を持っている。

3) センターにおける中等教員研修の種類

- ・センターでは、特定の国、地域の中等教師を対象にした研修を実施。
- ・それらは中等における日本語教育が盛んであったり、今後の発展が見込まれる国。
 韓国(1か月、50名)、中国(2か月、20名)、タイ(2か月、18名)
 オーストラリア・ニュー・ゼaland(3週間、45名)、アメリカ・カナダ・イギリス(20日、11名)
- ・センター研修生：約50%が海外の中等教育機関の日本語教師。(以上2003年度)

4. センターでの中等教員研修の研修内容

1) 授業

日本語：運用力を高める

世界の中等教員の運用力は、日本語能力試験の1級から4級に分布する。
 平均すれば2,3級程度。

教授法：コミュニケーションを重視した授業の方法や材料収集とその利用法考察

これは特に最近指導要領でコミュニケーション重視が前面に出てきた国の教師には重要。

事情：現代日本人の生活文化、伝統文化紹介

中等の教師は、訪日経験が多くはなく、普通の日本人の生活、行動、思考、伝統文化などの情報が不足している。そのための科目である。

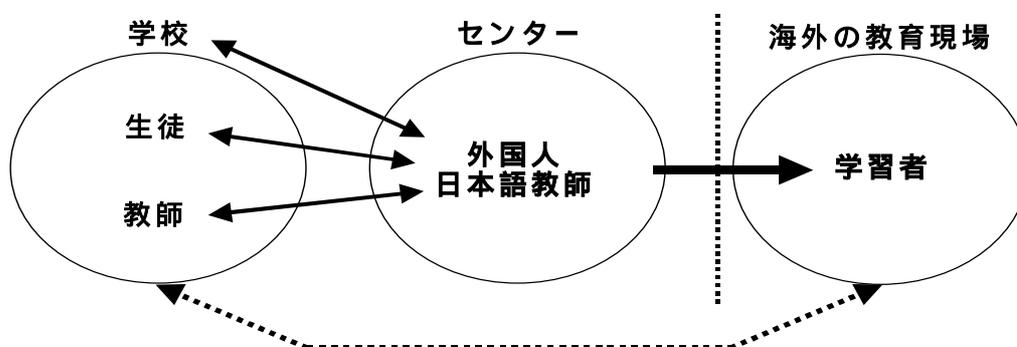
2) 文化体験プログラム

内容：体験学習(茶道、華道)、伝統芸能鑑賞、見学、ホームステイ、研修旅行など

趣旨：日本の伝統文化の体験や鑑賞と、普通の日本人の生活を体験する。多くは「事情」と連携をとる。

5. 中等交流

1) 中等交流の構造と理念



中等交流の理念 = 異なる文化を持つ他者との相互交渉の直接体験

外国人教師が中学・高校の生徒や教師と共に「考え、作り、
感じ、発見し、伝える」体験をすること

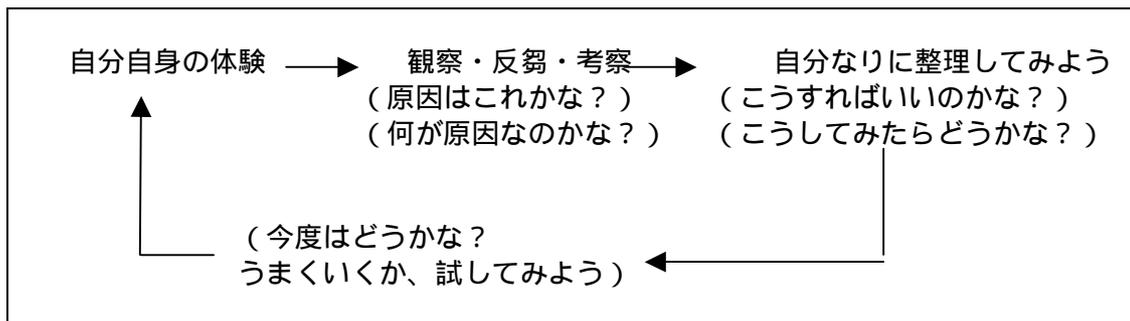
中等交流の基本方針

センターと日本の中学・高校の双方に得るところのある交流を目指す。
交流を通じ、センター周辺地域の教育機関に寄与する方途を模索する。

2) 中等交流の特徴

参加型学習：複数の学習者が場を共有し、相互に交流し、そこから何かを学習していく
ということ言えるでしょう。

体験学習：人間は実生活から学ぶものだという考えを基礎にしている。そこでは個人
の中で実際に体験し、それを観察し、そして振り返るという学びのサイクルが認められる。



3) 交流準備から終了までの過程

(1) 交流にかかる事務手続き

募集(1月)

埼玉県教育委員会を通して交流可能な高校を募集(県内の県立高校の場合)

応募(2月、5月)

高校から交流の希望を県教育委員会に提出

企画

各研修担当者が研修の必要に応じて交流を企画

内容協議

応募校と交流内容協議と準備

交流の授業部分((2)で詳説)

報告

相互に交流の結果を報告

(2) 交流の授業部分

事前準備

趣旨説明：外国人日本語教師、中学・高校関係者への交流の趣旨説明

準備作業：交流時にすることの準備作業

(例) 自己紹介文作成と送付、話合いのテーマ決定、質問事項整理等



交流 (例) ・代表あいさつ

・自己紹介や簡単なゲーム

・交流

・代表あいさつ



事後活動

アンケート調査：外国人日本語教師、中学・高校関係者へのアンケート調査

事後感想交換：参加者の感想の交換

報告：アンケート結果、担当者の感想などを報告しあう

6. 中等交流のパターンと過去の事例

1) 交流内容から見たパターン

(1) 情報移動型

情報提供：外国人日本語教師から中高生に何らかの情報を提供する。

・中学・高校から外国人日本語教師に何かを教えてほしいという要望があった場合(02 中国中等 / 深谷第一高校、03 短期春期 / 市立浦和南高校の例)。

・中学・高校が外国人日本語教師に何か聞きたいことがある場合(03 短期夏期 / 尾道北高校の例)。

情報収集：外国人日本語教師が、中等教育機関の生徒や教師に日頃疑問に思っていることを聞く場合(02・03 韓国 / 埼玉県イター・アクラブの例)。

双方向型：情報提供と収集を均等にする(03 長期 / 埼玉西高校・和光国際高校の例)。

(2) 教材作成型

教材作成：外国人日本語教師が、日本の中高生の助けを借りて副教材の材料を収集する場合(03 アメリカ・カタ・イリス / 蕨高校・常盤中学、03 オーストラリア・ニュージランド / 蕨高校・さいたま市立浦和南高校・常盤中学の例)。

この材料を利用して、日本滞在中にそれを副教材化する。

2) 過去の事例

交流の平均の姿

- ・参加者数：外国人日本語教師 10～50 名程度、中高生と教師 10～50 名程度
- ・交流形態：双方数名のグループを作り交流(これが双方の緊張や準備負担が少ない)

- ・ 情報移動：双方向を目指す
- ・ 交流時間：1 時間～1 日程度（通常は 1、2 時間が多い）
- ・ 交流回数：通常 1 研修（3 週間～2 か月）で 1 回

<表 2> 交流例概観

研修名	センター側			中高側				当日	
	位置付け	参加法	参加人数	参加形態	位置付け	参加法	参加人数	活動内容	実施場所
中国 中等	文化体験プログラム 総合日本語	必須	20名	1クラス	授業	必須	生徒 40 名、 教員 10 数名	研修参加者が中国事情紹介	高校
米加英	教授法	必須	8名	個人	課外	選択	生徒 21 名	研修参加者が中高生の生活についてインタビューし教材化	センター及びさいたま市近郊
短期 夏期	課外活動	選択	38名	修学旅行の 1 グループ	授業	選択	生徒 9 名、 教員 1 名	高校生がその進路に関する情報収集	センター
韓国	文化体験プログラム 総合日本語	必須	50名	複数校のクラブ	課外	選択	生徒 51 名、 教員 12 名	日韓の事情紹介	センター

3) 交流の感想

(1) 外国人日本語教師

自国にいるときに見たり聞いたりしてイメージしていた日本文化とは違った、若い世代の発想の仕方や考え方、生活スタイルがわかった。

高校教師の生活を知り意見を直接交換できたことは参考になる。

お互いの国の文化や事情を比較する契機になった。

(2) 中高生

外国人とのコミュニケーションといえば英語と思っていたのに、日本語でもできることがわかった。

話をした相手の国の文化が少しわかり興味を持った。一方自分が日本のことをあまり知らないことに気がついた。

海外出身の同級生に対する見方が変わった。

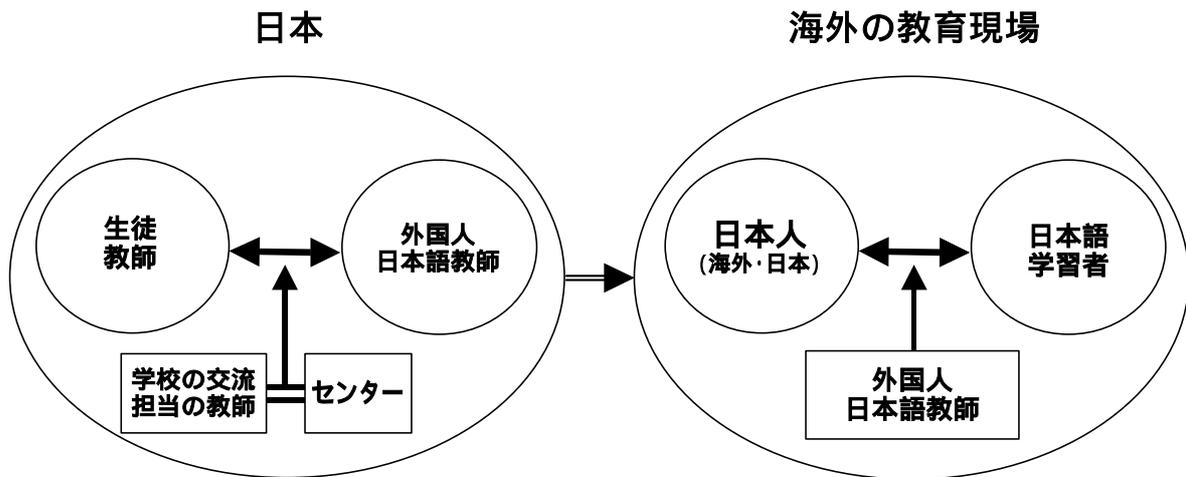
(3) 日本人教師

外国人教師の熱心さに心打たれた。

外国人教師の姿、日本語への取り組みなど、普段知りえない様々な情報に触れ合える機会を得て、有意義であった。

4) 中等交流とは何なのか

中等交流：中等を舞台に、教える、学ぶという役割が流動する場において、異なる文化を持つ他者との相互交渉の直接体験



7. 今後の発展のために

1) センターの外国人日本語教師に対する「事前準備」と「事後活動」の充実

事前準備：何のために交流活動を行うのか、どのような意義があるのか、またその中で研修参加者が自分自身の目標を確認することが重要。

事後活動：自らの体験を振り返ることであり、その時間の確保と方法の検討が必要。

帰国後：交流で得た情報や経験をどう生かすかについても、討議時間が必要。

2) 交流の場を設計する研修担当講師と中学・高校の教師の連携

継続による蓄積が必要：

協働型・参加型の学習の場にするためには、双方の担当者が考え方や目的を共有すべきである。そのため交流前の準備として目的や内容、方法に関する協議を綿密に行うことが望ましいが、そうすると関係者にとって負担が大きく継続が難しくなる。それを避けるため実践を蓄積し、その成果を「交流活動事例集」のような形で関係者と共有することを目指している。

8. 参考

国際交流基金： <http://www.jpf.go.jp/j/>

日本語国際センター： <http://www.jpf.go.jp/j/urawa/index.html>

日本語教育国別情報： <http://www.jpf.go.jp/j/urawa/world/kunibetsu/index.html>

日本語教育シラバス・ガイドラインシリーズ：

<http://www.jpf.go.jp/j/urawa/world/kunibetsu/syllabus/syllabus.html>

佐藤郡衛編（2002）『国際をテーマにした学習活動 50 のポイント』教育開発研究所

- 佐藤郡衛 (2002) 「国際理解教育は何をめざすのか」 『国際をテーマにした学習活動 50 のポイント』 教育開発研究所 6-7
- 杉澤経子 (2002) 「学校と地域の連携を考える - 地域に暮らす外国人とともにつくる授業 - 」 『わーい、外国人が教室にやってきた!』 武蔵野市国際交流協会 29-36
- 高木光太郎 (2002) 「国際理解教育で学習をどのように作りあげるか」 『国際をテーマにした学習活動 50 のポイント』 教育開発研究所 52-55
- 塘利枝子 (2002) 「子どもの異文化体験をどう生かすか」 『国際をテーマにした学習活動 50 のポイント』 教育開発研究所 80-83
- 中野民夫 (2002) 『ワークショップ』 岩波書店
- ファウンテン、スーザン (1994) 『いっしょに学ぼう - 学び方・教え方ハンドブック』 国際理解教育センター
- 武蔵野市国際交流協会 (2002) 『わーい、外国人が教室にやってきた!』 武蔵野市国際交流協会
- 安場淳・池上摩希子・佐藤恵美子 (1991) 『体験学習の試み』 凡人社
- 矢部まゆみ (2001) 「海外の初中等教育における日本語教育と〈文化リテラシー〉」 『21 世紀の日本事情』 3号 16-29
- 山西優二 (2002) 「国際理解教育とは - そのねらいとその方法 - 」 『わーい、外国人が教室にやってきた!』 武蔵野市国際交流協会 9-16
- 押尾和美・木谷直之・根津誠・八田直美・前田綱紀 (2004 予定) 「異文化理解を目的とした交流活動のあり方」 『日本語国際センター紀要』 第 14 号 日本語国際センター